

【主題】

探究活動における教科指導の在り方に関する考察

【副題】

コウノトリに関するふるさと学習を通して

【学校名】 若狭町立鳥羽小学校

【役職名・氏名】 校長・高橋 彰男

1 はじめに



鳥羽小学校は、人口約1万5千を数える若狭町の中央部に位置する全校児童96名の小学校である。

また、本校は周囲を山に囲まれ、豊かな自然に恵まれており、そこに住む人々は鳥羽者(もん)という自負とも言える呼称がある中で、古くから農業を中心に生活を営んできた。

ただ地域では近年、集落の中での空き家も増え、地元で成長した子どもたちもふるさとを出て生活することが多くなった。鳥羽地区全体の戸数もかつては600数十戸を数えていたが、現在は400数十戸となり、小学校児童数もかつての300名から減少の一途をたどっている。このような中で、現在の鳥羽小学校が取り組むべき課題としては、将来の鳥羽地区を支える人材の育成が喫緊のものとなっている。

このような実態を受け、本年度はスクールプランの目指す児童像として「ふるさとや自然、社会とつながる子」を設け、「ふるさと学習」の推進を通じた人材づくりを進めることにした。

2 これまでの経過から

まず、1学期始業式において、全校児童を前に「鳥羽のことが好きな人」と問いかけた。驚いたことに挙手したのは全体の半数程度であり、逆に「好きではない」と答えた児童もいた。この実態から地域資源にふれることでふるさとに誇りと愛着を持つことができるための取組の必要性を痛感した。

実はこの春、この鳥羽地区にコウノトリがつかいでやってきて、小学校横の公民館脇に建ててある巣塔で抱卵を始めるという出来事があった。これは若狭町としては初めてのことである。そのため、巣塔の真下にある学校田を使い、例年、5年生が実施しているコウノトリ米づくりについては今年度、コウノトリが抱卵に集中できるようにといった地区からの要望もあり、断念することとした。

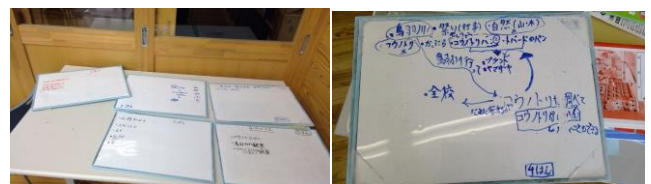
そこで、4月当初、校長が5年教室に出向き、今年度、コウノトリ米づくりは行わないこと、代わりに自分たちの住む鳥羽地区を誇れる場所として



ととらえ、PRするために、この1年、こういった取組を進めていくのがよいか話し合いの時間を設定した。

子どもたちからは、

- ①コウノトリのことについて調べたい
- ②鳥羽地区の祭りを調べたい
- ③鳥羽地区の自然を調べたい



などという意見が出されたが、1年間の計画を立てていく上では、課題は一つに絞るのがよいという意見が出され、コウノトリのことを学んでいくことになった。

3 活動内容

(1) 学習アドバイザーによる説明

しかし、コウノトリといっても、自分たちはコウノトリについて何を知っていて、何が知りたいのか明確ではなく、それぞれの児童の課題意識を深める必要がある。

そこでまず、地元在住の環境研究家の高橋繁応氏を

学習アドバイザーとして学校に招き、コウノトリの生態、生活などについて約2時間にわたり、写真や動画などを使いながら説明を受けた。この学習では、国語科における「きいて、きいて、きいてみよう」の単元で学んだインタビューの仕方の発展学習として、高橋氏に自分の思っていること、考えていることをもとに、知りたいことを引き出すことをねらって行った。



(2) 実際にコウノトリを見学

次に、今回、抱卵しているコウノトリのうちの1羽が兵庫県豊岡市にあるコウノトリの郷公園出身であることから、その生まれた場所に行ってみたいとの意見が出されたため、実際に全員で見学に出かけた。



見学に際しては、班ごとに調べたい内容について焦点を絞り、見学後のまとめの際に役立つように用紙にまとめた。

(3) 模造紙へのまとめ

見学後は、教室に戻り、グループごとに見学してきたことをまとめた。下書きが仕上がった時点で、再度、学習アドバイザーの高橋氏に来校いただき、まとめ方などへのアドバイスをいただいた。

ここでの学習は、国語科「みんなが過ごしやすい町へ」の単元で、調べたことを正確に表現することをねらい、教科書にある書式をもとにまとめることとした。

5年生は7月に若狭湾少年自然の家での一泊を伴う自然教室を行うため、1学期の活動としては、ここまですた。

(4) 1学期の活動を振り返って

夏季休業に入り、1学期の取組を担当とともに振り返る中で、教科との関わりをさらにどう深めていくかが今後の課題であることを確認した。

つまり「主体的で対話的な深い学び」を進めていく上で、探究的な活動が果たして「深い学び」となっ

ているのか、つまり授業者が体験活動などを実施する際に活動自体が教科本来の指導目標とどう結びつき、それをもとに今後どのように活動を進め、指導を進めていくのがよいかを考えながら、カリキュラムをデザインすることが重要であると考えたのである。それは単に、教科の学習の活用(発展)段階として探究活動を組み込むことで、教科との関連が図れていると考えるものではない。

かつてデューイが取り組んだ生活学校の考え方が「はいまわる体験主義」と批判されたのと同様に、子どもたちの学びは教科本来の目的と合致していなければ、ただ子どもたちの希望に沿って活動していくことに終始するだけで、そこからは本来、子どもたちに身に付けさせるべき学校の学習としての成果は望めないのと考えたわけである。

今回の話し合いの中では、教科ごとの一年間の単元配列表を作成し、探究活動との関連を図示するものを作成することも考えた。しかし、児童の実態などによって毎年姿を変える探究活動である限り、その作成には毎回、膨大な作業量が想定される。

そこで、2学期以降については指導者が年間の単元配置図を理解した上で、探究的な活動への取組に入る前段階である教科の学習時に、教科の指導目標にあった内容についてどれだけ達成できているかをその時点で自己評価させ、探究活動後に、同内容の目標が設定してある単元の教科学習を行い、再度、自己評価をさせることにした。これにより、教科の学習で培った力が探究活動を通して身についたかを教科学習の中で再確認できると考えたのである。

(5) 教科学習としての国語

学習指導要領国語解説編によれば、5年生における話し合いにおける指導事項として、「お互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすること。」とある。

そこで、2学期に入り、国語科「対話の練習 どちらを選びますか」の単元で、互いの立場を明確にしながら、計画的に話し合い、考えを広げたり、まとめたりする学習を行った。1時間目は、教科書のテーマののっとして、グループごとに「司会、ねこ側、犬側」の役割を決めて話し合った。そこでは「主張の理由が複数あげてあると納得できた」などとよりよい話し合い方について子どもの気づきがあった。

2時間目は、それらの気づきを活かすねらいで、自分たちの話し合いのテーマ「小学5年生がどちらのおかしにするかまよっている～たけのこの里 or きこの山～」で行った。ここでは、話し合いの際に、相手の発言した意見に対して、質問し、自分の意見を伝えるだけでなく、相手の意図を聞こうとすることができていた。

ここまでの活動をもとに一度、自己評価をさせてみた。以下が結果である。

① 話し合いの目的を意識して、友達の考えを聞くことができていますか。

ア 大変よくできた 7名
 イ まあまあできた 5名
 ウ ふつう 3名
 エ あまりできなかった 1名
 オ 全くできなかった 1名

② 友達の考えを聞き、新しい考えが生まれたり、自分の考えをくわしくできたりしていますか。

ア 大変よくできた 3名
 イ まあまあできた 11名
 ウ ふつう 2名
 エ あまりできなかった 1名
 オ 全くできなかった 0名

これをみると、授業後すぐの実施ということで子どもたちが意識していた部分もあり、自己評価は全般的に高めであった。

(6) 地区民体育大会でのPR活動

さて、1学期の活動の中で、子どもたちの中からは、自分たちの調べたことを鳥羽地区のみんなに知ってもらいたいとの意見が出されていた。そこで、どういった形で実現させるとよいか話し合った結果、9月24日に開催される地区民体育大会において専用ブースを設置し、立ち寄った体育大会参加者に、自分たちのこれまで調べたことを説明するとともに、コウノトリについてま

とめたラベルを貼ったペットボトルとコウノトリを描いたシー



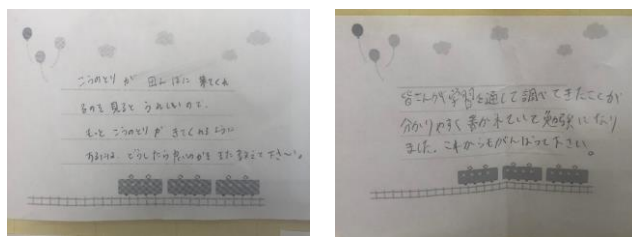
ルを、説明を聞いてくれた人たちに配付することにした。さっそく子どもたちはラベルとシールの2つのグループに分かれ、それぞれの準備にとりかかった。

そして体育大会当日。当初150本用意したペットボトルも、1時間あまりで全て配り終えた。また、ブースに立ち寄った地域の方々に自分たちから進んで話しかけ、コウノトリについて説明しようとする主体的で対話的な姿が見られた。

また、参加者の中には中学生、高校生姿も見られ、期せずして異校種間における話し合い活動や意見交換ができていた。



高校生、中学生からは次のような感想カードもいただき、子どもたちの意欲づけになったようである。



これらを見てみると、子どもたちの説明内容が同年代の人だけでなく高校生や中学生といった人たちにも納得してもらえる形で伝わっていることがわかる。

(7) 2回目の自己評価

体育大会翌日、さっそく学級で振り返りの時間をもつとともに、国語科の授業「よりよい学校生活のために」の学習をした。本単元では、よりよい学校生活のために、解決したい課題を見つけ、グループごとに話し合うというものである。例として地域に向けて自分たちの学習の取組を知ってもらいたいものが挙げられており、自分の立場を明確にした上で、話し合うこととされている。このことから前週末に行った取組は評価材料として適していると考え、再度の自己評価を行った。評価結果は以下のとおりである。

① 話し合いの目的を意識して、友達の考えを聞くこ

とができていますか。

- ア 大変よくできた 8名
- イ まあまあできた 3名
- ウ ふつう 5名
- エ あまりできなかった 0名
- オ 全くできなかった 0名

②友達の考えを聞き、新しい考えが生まれたり、自分の考えをくわしくできたりしていますか。

- ア 大変よくできた 3名
- イ まあまあできた 5名
- ウ ふつう 4名
- エ あまりできなかった 2名
- オ 全くできなかった 2名

この結果から①については2回目において全体的な改善が見られたが、②については逆の結果となった。これは、実際にやってみる中で、説明することに専念してしまい、相手の話を聴きながら考えるという「新しい考えや自分の考えをくわしくできる」という点までの余裕がなかったためであると考え。

実は同様の結果は本年度の全国学力学習状況調査の本校の結果にも表れている。国語の「目的や意図に応じ、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができる」という項目で、県正答率76.5%、全国平均70.2%に対し、自校正答率58.8%という結果が示すように、この点は本校児童の弱みと言える部分である。これは子どもたちにとって学校の外でいろいろな立場の人たちと話すという経験が不足していることに一つの原因があると考え。だからこそ、今回の体験活動は有効だったと考えることができる。

4. まとめ

今回は、コウノトリが小学校横の巣塔で抱卵したことをきっかけに、このコウノトリについての探究活動を実施してきた。年度当初の話し合いの中で出されたように、子どもたちのコウノトリに対する思いは様々でそれをもとに活動計画を立て、実践に移してきた。

コウノトリの郷会館への見学や地域の研究者による講話は子どもたちの探究心をますますまさぐり、次回の活動に対する意欲づけとなったようである。

ただその探究活動の中で、学校が本来目指すべき教科の指導目標との関連が新たな課題として出てきた。子どもたちのやりたいことをやるだけでは「体験」で

はあっても「中身」が伴わない。「体験」を行うにあたってそこには教科本来の達成すべき目標が必要なのであって、指導者はそれを絶えず意識しながら探究活動を進めていかなければならない。

そのため、今回は教科の学習の中で自己評価させる時間を設け、さらに探究活動の後で再度自己評価させるという方法をとった。この取組の中で、担任を含む指導にあたる教員からは、常に探究活動と教科の指導目標との関連を意識しながら実践を進めることができたという報告も聞いている。この方法がベストではないにしても、指導にあたる教員がこのことを意識することで「主体的で対話的な深い学び」の中の「深い学び」が、探究的な活動として成立することにつながる一つのきっかけになるのではないかと期待している。

本学級においては、この、地域へのPR活動だけで活動が終わったのでは当初の目標を達成したとは言えない。そこで、今後の活動として、

- ① 本来行うはずだったコマ作りをふるさと学習として実践している同じ町内の小学校と（それぞれのふるさと学習としての取組としての）オンライン交流学习を行う。
- ② 福井県内でコウノトリ観察に長く取り組んでいる越前市白山小学校とコウノトリについての意見交換交流会をオンラインにて実施する。

を計画している。この2つの交流学习の中で今回の自己評価を再度行い、5年生として求められる話し合いについての指導事項の達成をさらに図ることとする。

5. 最後に

現在の子どもたちが成人となる2030年代はSociety 5.0 と呼ばれ、変化の激しい時代とされている。その中で、自ら課題を見つけ、その課題に対して自分の持つ知識を活用して解決することが望まれているわけであるが、そういった知識を形作る基盤として今後、より一層体験活動や探究活動の充実が求められていくことであろう。

そして、その際に指導者がそれらの活動を教科で求める力とどう関連づけることができるのか、また、その探究活動を通して子どもたちにどういった力を身に付けさせることができるのかを見極めて取組を進めていくことがアクティブラーニングにとって不可欠であり、ひいてはそれが将来の鳥羽地区を支える人材の育成につながるものと考え。